



私は現国が嫌い



葉山ユタ

私は現国が嫌いだ。

成績は良いけれど、授業自体がつまらない。

漢字の書き取りや文法なんて、そんなに勉強しなくたって、ちゃんと出来る。

読解問題などの「それ」のそれとは何を意味しますか、みたいな、馬鹿じゃないのと思う設問が嫌だ。

小説の抜粋を読まされ、この作者の意図は何でしょう？という設問も気に入らない。模範解答を読むと、その答え、作者に聞いてきたのか？と突っ込みたくなる。

大体、本好きの生徒なら、それなりの成績が取れるのが現国じゃないだろうか。私は本を読むのが好きで、本自体も大好きだけれど、現国の授業は面白くない。

いっそ小説の書き方とかシナリオの書き方を、専門の講師を呼んで来て教えてくれればいいのに、といつも思う。

私は公立高校の二年生女子。

来年は受験だから、今年、無難な私立文系クラスに進んだ。

現国の教師は、星と言う名前の中年の男性なのだが、一人で一方的に喋るタイプで、自分の話に自分で大受けし、ワハハハと突然高笑いを始め、生徒達を仰天させる面倒臭い人だ。

見かけは水木しげるが描く、頭が扁平で、メガネを掛けた出っ歯の男の人に似ていて、男子の付けたアダ名はホシガッパ。

最初の授業の時、先生の名前は星だけど、星新一とは親戚じゃないよ、と言って突如高笑いしたが、みんなキョトンとするばかりだった。私は、ショートショートの新様と呼ばれた氏の作品は読んでいたが、クラスメートのほとんどは、誰それ？って顔だった。

世代が違うんだから仕方ないと思うけど、この人、毎年授業の初めにこれをやってるんだろうなって思ったら、色々な意味で切なくなった。

困った事にこの先生、たまに生徒が質問したり、よく分からないと異議申立てをすると、真っ赤になって興奮し「ぼくは思考を中断されるのがキライなんだよ！」とキレ気味になり、生徒の質問や疑問は置き去りにしたまま、学生や学校、果ては文学や社会に対する罵詈雑言で授業が終わるので、そのうちみんな質問をせず、板書に間違いが有ってもスルー、というのがお約束になった。

ウチのクラスの生徒は、特に優秀という事はないけれど、特に悪い子もない。

みんな、そこそこ勉強が出来て、そこそこ要領が良く、そこそこ陰で遊んでいる、至極フツアの生徒ばかりだ。

波風立てず、空気を積極的に読んで、面倒には関わらないが適当に親切。少なくとも表面上はみんな仲も良い。ある意味大人だ。私は内心、こういった多少の事は見ざる聞かざる言わざるで、上手いこと世渡りする姿勢を「積極的事なかれ主義」と呼んでいる。

いいじゃないか、事なかれ主義。

勿論、人にはこんな事言わないが。

ネガティブだから言えないのではない。ポジティブに「言わない選択」をしているのだ。

それが「積極的事なかれ主義」ってもの。

ところで、今はお昼ご飯も済んだ満腹の午後、その面白くない現国の授業中だ。

私は窓側の一番前の席で、窓から差し込むうらかな陽の光を全身に浴び、暖かく良い気持ちだ。気持ち良すぎて意識が朦朧としている。

他の生徒達も、催眠ガスを吸い込んだかのようにボーッとしている。

郊外の学校につき、外部の騒音はほとんど無い。静かな環境なのだ。

教室全体が、静謐な淡い霧に沈んでいるかのようにボンヤリと霞んでいる中、星先生の、やや高めの声だけが響いている。眠気や疲労が、時として人の判断を狂わせるのは周知の事実だが、この日この時、まさに私がそうだった。

いつも教卓の前で話す先生が、なぜだか今、窓枠にもたれるようにして教科書を読んでいる。

つまり私の真ん前だ。こんな目の前にいられたら、居眠りなんかするわけにはいかないのだから、私は必死に眠気と戦い、授業に集中しようと頑張っていた。

しかし、その日の授業の内容は、まずい事に現代詩だったのだ。

静かな教室の中で、一定のリズムを持って続けられる先生の緩慢な詩の朗読は、催眠術のように私の意識と無意識の壁を融かし、まぶたは自然に下がり、私の思考は現実と夢想の間を行ったり来たりし始めた。

詩の内容は、何か雲に関するものだったが、良く覚えていない。
私は窓の外、青空にふわりと浮かぶ白い雲を、ぼんやり左目の端で捉えていた。

そうして、前述の状況で、いつもの理性の働きが完全に鈍っていたんだと思う。
先生が、ひと通り今朗読した詩の説明を終えた後に、こう言った。

「有名な詩人の石川啄木にも、雲を題材にした作品が有るぞ。えー、あれは、雲が付くタイトルで、ああ、
そう 『吾輩は雲である』だ」

質問はしない。間違いが有っても指摘しない。スルーがお約束。の、はずだった。
積極的事なかれ主義者は、何かに違和感を感じたとしても、すぐに言葉に出したり、行動に移したりはしない。

なのに、繰り返すが私はその時、理性が鈍っていた。

私は、目の前の教師が、まるで自分の友達か、親戚のオジサンかのように反応してしまったのだ。
無意識に言葉が口からこぼれ落ちた。

そう、私は口に出してしまったのである。目の前の教師に向かって。
たった一言。ポロリと。

「雲は天才である」

先生が動きを止め、私を見た。

私は自分の声にびっくりし、一瞬にして覚醒した。
夢想は吹っ飛び、見慣れた教室の一角に、リアルな現実に、意識が戻った。

心臓がキュッと縮こまり、額の生え際にジワッと汗が滲んだ。顔に血が上り、カーッと熱くなる。心臓の音が、ドキドキと耳に聞こえる。

どうしよう！ヤバい！

生徒の何人かが、眠りの霧の中からぼんやりと目覚め、ちょっとだけ眉を動かして、こっちを見ているのが分かる。

なんと、積極的事なかれ主義者の私とした事が、痛恨のミス！うっかり先生の間違いを指摘してしまった！

流石に、件の啄木の作品はタイトルも違うが、内容も雲を題材にしていないし、詩でもない、そもそも今回の授業とは何の関わりも持たない、未完の小説だ、と言いはしなかったものの、先生の逆鱗に触れたのは間違いない。

私は先生の逆ギレを覚悟し、頭を低くして身を縮めた。

「何言ってんだ、お前」

え？

こちらの緊張とは裏腹に、幕切れはあっさりしたものだった。

小馬鹿にしたように小さく言うと、先生は私の顔など見向きもせず、何事も無かったかのように教卓の前に移動して授業を続けた。一瞬目覚めかけ、眉を上げた生徒達も、再び眠りの霧の中に沈んでいった。

...先生は、気が付かなかった...

私が先生の間違いを訂正した事に、先生は気付かなかったのだ。

私は安堵し、小さく長く息を吐いた。

多分、たかだか二流高校の女子生徒に、明治の作家が書いた作品についての知識が有るなんて、思いもしなかったのだろう。想定範囲外過ぎて、私の言葉を寝ぼけた呟きくらいにか思わなかったのではないだろうか。

何にせよ助かった。

高ぶった心臓の鼓動も徐々に落ち着き、私は額に滲んだ汗を指先でそっと拭った。

神様、どうか先生がこの間違いについて、ずっと気が付きませんように。少なくとも、私が卒業するまでは。

つつがなく授業が終わり先生が教室を出た後、隣の子が、あんたホシガッパに何て言ったの、と訊いてきたが、勿論積極的事なかれ主義者の私は、別に一、とニコヤカに微笑んでやり過ごした。

「あんた、現国の成績いつもいいよね。勉強してるの？それとも、現国が好き？」

「本は好きだから、よく読むよ。だからじゃない？特に勉強、頑張ってるわけじゃないもの」

そして、私は現国が嫌いだ。

了

私は現国が嫌い

<http://p.booklog.jp/book/18570>

著者：葉山ユタ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hayamayuta/profile>

発行所：ブックログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/18570>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/18570>